

3

辛亥革命までに刊行された 中国語解剖学書・生理学書について

松本 秀士^{1,2)}, 坂井 建雄²⁾

¹⁾立教大学文学部 文学科文芸・思想専修, ²⁾順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学

従来、近代中国にはじめて西洋の解剖生理学を伝えたとされてきたのが、イギリス人医療宣教師ホブソン編訳による『全体新論』(1851)である。しかし、同書が一般人向けの啓蒙書であったことから、後の来華医療宣教師は専門レベルの西洋医学を中国に伝えることを急務と考えていた。それを受けて、編訳されたのがアメリカ人医療宣教師オスグッドらによる人体解剖学の専門書『全体闡微』(1881)であり、『グレイ解剖学』(グレイ, 1858)をベースとするものであった。『全体闡微』は本格的な人体解剖学を中国にもたらしただけでなく、中国語解剖学用語の標準化も行っていた。そして、同書で示された中国語解剖学用語に基づいた人体解剖学・生理学の専門書が刊行されていった。たとえば、アメリカ人医療宣教師カー編訳による『体用十章』(1884)やイギリス人医療宣教師ダッジョン編訳による『全体通考』(1886)があげられ、前者は『グレイ解剖学』(グレイ, 1858)、後者は『生理学提要』(ハクスリー, 1866)を原書とするものであった。その後にも中国語解剖学書・生理学書が次々と編訳されていったが、その全容は明らかにされていない。本発表ではそれらのことを踏まえた上で、中国の歴史の一つの節目である辛亥革命(1911-1912)までに刊行された中国語訳の人体解剖学書・生理学書を焦点に報告したい。

先述の『体用十章』の後に刊行された生理学書として、アメリカ人医療宣教師ポーター編訳による『省身指掌』があり、1891版・1897版・1908版がみられる。同書は『十四週間人体生理学』(スティール, 1872)を原書としており、版を重ねながら『全体闡微』で提示された中国語解剖学用語に対する若干の修正を行っている。一方、『全体通考』の後に刊行された人体解剖学書として、アメリカ人医療宣教師ホイットニー編訳による『体学新編』(1904)がある。同書は当時の最新版の『グレイ解剖学』を原書とする。また、同書は『全体通考』『省身指掌』による中国語解剖学用語修正の動き等を背景にして、二度目の解剖学用語標準化を担ったものでもある。次に『体学新編』の刊行を受けて刊行された生理学書がイギリス人医療宣教師コースラン編訳による『体工学』(1906)で、『生理学ハンドブック』(ハリバートン, 1896)を原書とする。同書は、『体学新編』で定められた中国語解剖学用語を用いている。前出の『省身指掌』も1908版においては、『体学新編』で定められた中国語解剖学用語を採用している。次に、『体学新編』の後に刊行された人体解剖学書として、コ克蘭ら編訳『赫氏解剖学講義』(1911)、および前出コースラン編訳『解剖学図譜』(1911)があり、両書ともに『体学新編』で定められた解剖学用語を用いており、それぞれ順に『実用解剖学』(ヒース, 1874)、『解剖学教科書』(カニンガム, 1902)を原書とする。

1900年代においては、日本経由で西洋の人体解剖学が伝わってくる。その大きな担い手となったのが丁福保である。同氏は自ら上海医学書局を組織して、当時としては医療宣教師に並ぶ大規模な西洋医学叢書、『丁氏医学叢書』を刊行している。同叢書には、原書は不詳であるが、当時の日本で一般的であった解剖生理衛生学書の体裁をもつ『新靈枢』(1908)があり、同書によって人体解剖学・生理学・衛生学が概説されている。同氏は後に本格的な人体解剖学書として『新撰解剖学講義』(1909)を訳していて、これは森田齊次による『解剖学講義』(1906-1908)を原書とする。『丁氏医学叢書』で用いられた解剖学用語は、先の医療宣教師が定めたものではなく、和製の解剖学用語である。

以上のように、中国における西洋解剖学伝播は、長らく異邦人である医療宣教師によって行われてきた。そうした流れにおいて、邦人主体により、日本経由の西洋解剖学が伝えられるようになったことは、大きな変化であり、これによって、現在の中国で用いられている和製解剖学用語がもたらされていることは大きな特徴である。